

ブータンは、「国民総幸福度というものを指標にして国を運営している」

開倫塾

塾長 林 明夫

おはようございます。開倫塾塾長の林明夫です。先週、早稲田大学の大学院である講座がありまして、特別に出させていただきます。今日は、そのお話をさせていただきます。

ブータンという国があります。ネパールの隣、インドの北にあり、人口70万くらいのあまり大きくない国です。その国の新聞社の編集局長さんからお話をお聞きました。放送をお聞きの皆様にもお伝えたいと思います。ブータンでは、若い王様が唱えたことを一所懸命やっているそうです。それは何かというと、国民総幸福度といいますか、国民が幸福になることが一番大事だということです。よく、GNP(国民総生産)などという形で、国の発展の都合や経済力をはかることがあります。それと同じような大切さで国民が幸福になることを目指したいと、グロスナショナルハピネスつまり国民総幸福度というものを指標にして国を運営しているというお話でした。

とても感銘を受けました。おそらく日本の社会が多く失ってしまったものかもしれませんが、幸福になるということは、国を運営していく上でも人々が物事を考える上でも、一番大事なものです。その中身は、1つは、持続的に、ゆっくりでもよいから困難なく開発が進むようにするということです。

また、環境を保持しようということです。ブータンの国土の72%は森林だそうです。その木を伐採すればお金になりますが、木は大切なものなのでなるべく伐採しないようにしようということです。また、トレッキングをするのにも素晴らしいところなので、観光客に呼びかければいくらでも来てくれそうですが、その観光客がたくさんのお金を落とすことによって国がおかしくなってしまうことも避けたいということです。できるだけ少人数で来ていただき、ゆっくり楽しんでもらうことで、環境を守ろうということです。

そして、伝統的な文化を大事にしようということです。それはどういうことかといえば、自分自身は何かということ、それを考えるアイデンティティ(自分らしさ)というものを追い求めるということになります。皆さんもご存じかと思いますが、ブータンには独特の民族衣装があります。「ゴ」という名前の、日本のドテラに似た美しい着物のようなもので、男の方も着ていらっしゃいます。ブータン人は、日本人と同じような顔かたちをしていますので、着物を脱ぐとアジアの国々の人たちと区別がつかなくなってしまう。ですから、民族衣装を着ることによって、ブータン人としてのアイデンティティ、自分らしさ、ブータン人らしさを守ろうということです。つまり、変化しないことを選択しているわけです。また、民族衣装を大事にすることで、礼儀作法を守っているのです。

さらに、よいガバナンス、グッドガバナンス、日本語には訳しにくいですが、不正がないという形でガバナンスをしていきたいと考えているそうです。

ブータンは王様が支配する国ですが、王様に対して、私はこのようなことを思っていますという手紙を出す権利があるそうです。また、皆が、憲法を作って立憲君主国にしたいということで、31名の憲法を制定する議員を国民の中から選んで、今作っているそうです。世界の30か国にどのような憲法がある

のかを調査して自国の憲法を作っているそうですが、よいガバナンスを心掛けたいということで、この4つの大きな柱からなる開発を目指しているそうです。1つは、ゆっくりしたスピードで少しずつ開発したいということ。それから環境を守りたいということ。森林を売ったり多くの観光客を入れればお金にはなるが、それをできるだけ少なめにして環境を守りながら国を作りたい。それからアイデンティティという自分達の文化を大切にしたいということ。礼儀作法を守り、民族衣装をできるだけ公の場で着用する。それから不正がない形で国を治めていきたいということ。このように、ブータンという国は国民幸福度(グロスナショナルハピネス)ということを大事にしながら運営しているということをお聞きしました。

「日本はどうか」と質問させていただくと、日本に2か月間滞在しているという編集局長さんの答えは、「日本のお年寄り是不幸だ」というものでした。その理由を「あんなに元気な方がいらっしゃるのに、何もすることがなく無為に生活しているからだ」と言っていました。ブータンのお年寄りには、やることがたくさんあるそうです。「家の手伝いや社会の仕事などたくさんあるのに、日本のお年寄りは本当に無為に過ごしている。収入は何十分の一かもしれないがブータンのお年寄りの方が幸福のように思えるので、日本のお年寄りも元気に活躍してもらいたい」ともおっしゃっていました。

また、日本の子供たちもあまり幸福ではない、ゲームに熱中してなかなか勉強もしていないようだ、ブータンの子供たちのほうが非常に真剣に勉強しているというような、日本が忘れてしまったようなことも編集長からお聞きしました。

今日は、このことを皆さんにお聞かせしたいと思ひまして、紹介させて頂きました。